

Vol. 5
2015年
秋・冬号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング 発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL 弘本) ※U-CoRo=ゆーこーろ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

大正～昭和初期 映画黎明期

■空前の市街地開発と賑わいの中に誕生した映画館

近代の大阪には、続々と工場が立地して、全国各地から職工さんをはじめたくさんの人々が集まってきました。上町台地では、大阪城周辺一帯に大阪砲兵工廠と呼ばれる軍事工場群が広がり、台地の東に広がる田園地帯も、耕地整理とともに工場と住宅のまちへと変貌。台地の北にも紡績工場等が集積。空前の市街地開発と賑わいの前線に、映画館が開かれていきました。暮らしのすぐそばに、欠かせない娯楽の場・映画館が寄り添っていたのです。



(上)無声映画時代の城東館外観。右手の看板には「一週間各土曜日毎二取替」の文字。正面には額入りの絵看板が並び、[同館は昭和10年頃に建て替えられ、戦後も営業] (右)木製長椅子が並ぶ劇場内部。スクリーンの前には舞台と楽団のボックス。(右)城東館にいた専属の音楽隊。(水野千鶴子氏提供)

映画館が並んだ玉造界隈 (戦前～戦中)

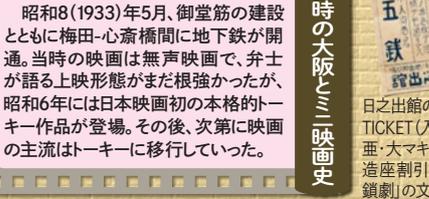
子ども時分は、玉造は心齋橋と並ぶ賑やかな賑やかで、親と一緒に、手を離したら迷子になると言われました。父が「城東館」を経営していましたが、昭和10年頃に建て直して「城東劇場」(通称「城劇」)に。当時「松竹映画」のドル箱」と言われたほど観客が入ったそうです。

私の思い出 水野千鶴子さん (昭和8生まれ、天王寺区在住)



玉造の日之出通商店街は、常に大勢の人で賑わっていた。(玉造稲荷神社提供)

昭和8(1933)年頃、御堂筋の建設とともに梅田-心齋橋間に地下鉄が開通。当時の映画は無声映画で、弁士が語る上映形態がまだ根強かったが、昭和6年には日本映画初の本格的トーキー作品が登場。その後、次第に映画の主流はトーキーに移行していった。



大正12年生まれ、北区在住の青空書房店主 坂本健一さんのイラストと映画館の思い出

フィルム運びも楽じゃない (戦前～戦中)
映画のフィルムは、何館かで回していることも多かった。観ていて、あれ、このストーリーおかしいと思ったら、隣のフィルムが抜けているなんてこともあった。今では想像もつかない話。フィルムが擦れて傷がいつぱいついていて、「雨が降っている」というものもよくあった。

東の心齋橋と呼ばれた玉造は映画館の街だった！



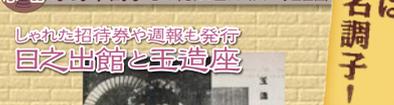
弁士席と楽団ボックスがある城東館の内部



専属の音楽隊

2階席は少し高くて、前は枱席 (戦前～戦中)
城東劇場は、1階は全部椅子席やったけれど、2階の前は枱席。2階の方が料金がかった。私も子どもの頃に手伝わされて、2階に上がるところで番をして、「おなおりさ〜ん」と言って案内したものです。

私の思い出 水野千鶴子さん (昭和8生まれ、天王寺区在住)



しゃれた招待券や週報も発行 日之出館と玉造座



玉造座が出していた玉造週報 (大正14(1925)年)。当時は、映画とともに役者の実演もあった。(玉造稲荷神社提供)

映画は庶民の娯楽の王様 (戦前～戦中)
戦前～戦中には、近鉄線で鶴橋に来て、そこから歩いて砲兵工廠に通勤する人が多かった。玉造まで商店街が続いていて、映画館がいくつもあった。その時分、映画は庶民の娯楽の王様。玉造座の手前・大丸ストア、朝日座の隣には高島屋もあり、買い物にも便利でした。

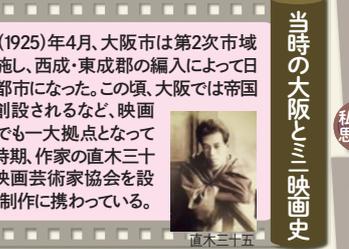
私の思い出 岡田安弘さん (昭和13年生まれ、天王寺区在住)



映画館の近くにはお風呂屋さん (昭和初期)
昔の映画館のことを思い出すと、カフェやビリヤード、射的屋などが近くにありましたが、お風呂屋さん必ずと言っていいほどありました。風呂に入って映画を観るのが、庶民にとっての大きな楽しみだったのでした。

思い出の映画館と 身近なまちの戦前・戦後

大阪のまちが急速に拡大し、やがて過酷な戦災から復興へ疾走した時代、それはちょうど映画の誕生と隆盛の時代に重なっています。上町台地をとりまく、映画館の盛衰の軌跡をたどると、身近なまちとそこに生きる人々の喜怒哀楽、戦前・戦後を生き抜いてきた日々の息遣い、地域の生活史が浮かび上がってきます。戦災を乗り越え、まちのなかに所蔵されてきた、貴重な資料と思いつく語りから紐解きます。



無声映画「丹下左膳」を上演中の映画館。舞台脇に弁士、前のボックスには音楽隊。2階席にも人影。(イラストは坂本健一さん)

当時の大阪と三映画史

大正14(1925)年4月、大阪市は第2次市域拡張を実施し、西成・東成郡の編入によって日本一の大都市になった。この頃、大阪では帝国キネマが創設されるなど、映画制作の面でも一大拠点となっていく。この時期、作家の直木三十五も連合映画芸術家協会を設立し、映画制作に携わっている。

天五中崎通商店街では★旭座 (定員700、日活・洋画、黒崎町) ★大阪座 (一、洋画、黒崎町)



★は当時の常設映画館(「映画年鑑」1934年(ほかより) 図中のポイントはおおよそその立地です。 ※()内は定員、主な上映映画、住所



昭和6(1931)年に昭和館の前で撮られた葬列の写真。手前の土の道は新平野川の土手。建物の2階側面には「昭和館」、ひさしの横には「昭和キネマ」の文字。[同館は昭和40年代半ばまで同じ建物で営業した] (井上平八郎氏提供)



昭和10(1935)年に改装開館した 日の丸館

鶴橋界隈

(上)既存の東朝日座を改装して開館した日の丸館。(右)同館のものかと思われる見取り図には、舞台前に「奏楽室」(楽団ボックス)、2階下の階段下に「下足預かり処」の記載。[同館は戦後も営業し、昭和30年代後半に閉館] (井上平八郎氏提供)

戦前・戦中は館内に臨官席も (戦前～戦中)

父と叔父が生野で昭和館、電気館、パーク館、日の丸館の4館をやっていました。昭和館の最初の名前は昭和キネマで、昭和の初めに開館。父によると、最初は活弁でやっていたそうで、弁士がいて、楽団もいた。戦前・戦中には、警官の臨官席もあったそう。

私の思い出 井上平八郎さん (昭和17年生まれ、生野区在住)

映画館独特のあの臭い (戦前～戦中)

鶴橋大劇場にはお芝居を、映画は鶴橋本通りの鶴橋館に母に連れられて行ったことがある。エノケンの映画とか風寛寿郎のチャバラ物、軍隊の映画とかを観ました。覚えていたのは映画館独特の臭い。当時、西洋映画もやるし、ニュース映画もやっていた。

私の思い出 宮代 純さん (昭和7年生まれ、生野区在住)

昭和8(1933)年頃の常設映画館

- 玉造界隈では
★城東館 (新町、黒門町)
★玉造座 (新キネマ、南玉造町)
★朝日座 (日活、黒門町)
★ヤマト館 (一、洋画、黒崎町)
★日の出館 (一、洋画、黒崎町)
- 鶴橋界隈では
★鶴橋館 (定員500、松竹・洋画、鶴橋北之町)
★鶴橋大劇場 (一、洋画、鶴橋南町)
★御幸館 (定員500、松竹・洋画、鶴橋南町)
★昭和キネマ (昭和館) (定員700、日活・洋画、黒崎町)

戦後 映画最盛期

■幼い頃から青年期まで傍らにあった映画館街

身近な街角から、映画と映画館は、戦前・戦中・戦後の歴史を形づくってきたといっても過言ではないでしょう。戦中には戦意高揚にも利用された映画ですが、戦後には一転、憧れの消費文化、世界の情勢や民主主義を感じる窓になっていきます。ご近所の映画館は、人情の機微や、異国の文化に触れ、洋の東西を越えて、社会の光と影、驚きや感動に心を震わせる場となりました。映画館は、子どもから大人への成長の階段ともなり、まちの戦後復興を支えていったのです。

昭和25(1950)年、寺田町駅近くに開館した電気館



大映封切館として近隣の人に親しまれた電気館の開館当時の写真。正面右上の次週予告には、長谷川一夫が主演した「城ヶ島の雨」の看板。(井上平八郎氏提供)

- 玉造界隈では
 - ★城東劇場 (定員595、大映、東宝)
 - ★五造東宝映画劇場 (定員500、東宝、東映、東宝)
- ★第一電気館 (定員300、洋画混、唐沢町)
- ★玉造三光館 (定員700、邦画混、玉造南通)

- 今里界隈では
 - ★松栄映画劇場 (定員740、邦画混、大今里北之町2)
 - ★今里東宝映画劇場 (定員350、東宝・日活、大今里本町1)
 - ★今里ロマン座 (定員350、洋画混、大今里本町1)
 - ★二葉館 (定員181、大映・新東宝、大今里南之町1)
 - ★今里松竹 (定員505、松竹、大今里南之町1)
 - ★今里劇場 (定員350、洋画混、大今里南之町1)
 - ★新橋映画劇場 (定員480、東映、大今里南之町1)



- 天満橋界隈では
 - ★京阪松竹(の5日活)
- 松屋町界隈では
 - ★中央シネマ
- 上六界隈では
 - ★上六キャピタル劇場 (定員550、新東宝、東映、東宝)
 - ★近映地下劇場 (定員700、大映、東宝、上本町6)
- ★近映大劇場 (定員1100、洋画、上本町6)
- ★三和劇場 (定員474、大映、日活、上本町7)

- 鶴橋界隈では
 - ★今里パレス座 (定員700、洋画混、猪飼野東2)
 - ★鶴橋映画劇場 (定員267、松竹、鶴橋北之町2)
 - ★昭和館 (定員305、洋画混、猪飼野中2)
 - ★幸楽館 (定員250、東宝・大映・洋画混、猪飼野中5)
 - ★日の丸映画劇場 (定員450、松竹・洋画混、猪飼野中5)
 - ★桃谷第一映画劇場 (定員232、各社・洋画混、東横谷3)
- 寺田町界隈では
 - ★電気館 (定員700、新東宝・大映、南生野町1)
 - ★生野名園座 (定員400、洋画混、南生野町)
 - ★生野映画劇場 (定員400、東宝・東映・日活、林寺町1)
 - ★パーク館 (定員450、洋画混、南生野町)

松屋町界隈

店頭にいつも映画ポスター(昭和30年代)

私が結婚した昭和28年には、今の地下鉄松屋町駅近くに中央シネマがありました。婚家は長堀通に面したところで商売をしていましたが、店の前に映画ポスターを張っており、いただいた券で時々観に行ったのを覚えています。

玉澤静恵さん(昭和5年生まれ、中央区在住)

仕事抜け、夫は映画館へ(昭和30年代)

昭和33年に安堂寺町の印刷屋さんに嫁ぎました。結婚当初から、主人がふといなくなったと思うと、近所にあった中央シネマに行っていました。毎度のことなので、「ちょっと用事が」と言って、裏口からのぞかせてもらい、連れ戻していました。

黒川好子さん(昭和7年生まれ、中央区在住)

天満橋界隈

憧れのアメリカンスタイル(昭和30年代)

京阪天満橋駅の東口近くに日活があり、確かそこで裕次郎の映画を観た。高校生の時は邦画より洋画。同級生が「ウエストサイド物語」にはまり、自分もナンパの南衛で観た。ダンスにファッション、車と、アメリカンスタイルがかっこ良かった。

吉見孝信さん(昭和21年生まれ、中央区在住)

上六界隈

怪獣ガメラとアイスクリーム(昭和40年代)

上六の大映で、ガメラとかの怪獣映画を観た。子ども向け映画の2本立て。昭和40年代の頃です。覚えてるのは、映画館にしかないアイスクリームがあったこと。ビスケットアイスクリームを挟んだものでした。

富士原純一さん(昭和32年生まれ、近年まで天王寺区在住)

モナカアイスは映画館で(昭和50~60年代)

私の家では商売でアイスクリームを扱い、映画館にも入っていました。キタとミナミで、東宝系の15館くらい。主にはモナカのアイスで、銀のアルミ箔でラッピングしたもの。売り子の女性たちも、こちらから入って買っていました。

神藤雅晴さん(昭和21年生まれ、北区在住)

当時の大阪と三映映画史

終戦直後110万人と、最盛期の約3分の1になっていた大阪市の人口も、戦後復興に伴い急速に増加し、昭和35(1960)年には300万人に達した。この間、昭和33(1958)年には、全国で映画人口が11億人を越え、過去最高を記録。シネマスコープやシネラマ作品など、映画のワイド化も進んだ。一方で、昭和29(1954)年にNHK大阪放送局がテレビ放送を開始。娯楽の中でテレビの比重が次第に増していった。

当時の大阪と三映映画史

戦時中の空襲で、大阪市内の映画館もその大部分が灰燼に帰した。しかし、戦後は各所で映画館が再建・新設され、映画産業も再興していく。観客動員数も増え、昭和20年代中頃から映画のカラー化も進んだ。

思い出の映画館と身近なまちの戦前・戦後

昭和23(1948)年頃の城東劇場の内部



戦後、配給会社を松竹から大映に変更した後の写真。舞台両側に「DAIEI JYOGEKI」の文字。スクリーン前には当時の人気スター片岡千恵蔵主演の「三十三の足跡」(昭和23(1948)年公開)の予告。(水野千鶴子氏提供)

戦争の時代から一変(戦後~昭和30年代)

戦後に、映画と音楽が、いっぺんに外国から入ってきた。私は小学校高学年の感性豊かな年代。外国の映画音楽はもちろん、クラシック、シャンソン、タンゴ、ウエスタン、ジャズ、そういうものを全部吸収できた。戦争で暗かったのこっぴんべんに変化した。

吉岡武さん(昭和12年生まれ、天王寺区在住)

邦画も洋画も玉造で(昭和30年代)

昭和30年代前半、私が中学校に行く頃には、玉造にも冷房が入る映画館があり、心齋橋まで行かなくても、邦画はもちろん、洋画も観ることができました。砲兵工廠はもうなくなっていました。日之出通商店街はまだ賑やかでした。

鈴木一男さん(昭和22年生まれ、中央区在住)

昭和30年代後半に再度、配給会社が変わり、城東劇場は城南東映に名称を変更。写真は開館時のもの。昭和40年代には高倉健の人気シリーズなどを上演した。[この後、同館は昭和48(1973)年3月まで営業](水野千鶴子氏提供)



映画館で鬼ごっこ(戦後~昭和30年代)

鶴橋の昭和館に子どもたちで潜り込んで鬼ごっこ。まわりの黒い幕をぐるぐる巻いて身体を隠したり、1階~2階と走り回って、怒られたこともあった。1階に売店があって、1枚5円の大きなおかきや、酢こぶ、ラムネを売っていました。

吉村健一さん(昭和22年生まれ、生野区在住)

今里には映画館が何館も!(戦後~昭和30年代)

今里の商店街は、二葉館など映画館が何館も並び、賑やかなところでした。このあたりは、元々、芸能に関わる人も多く住んでいた場所。大正から昭和初めには、今の東大阪市の小坂や長瀬に帝国キネマの撮影所もありました。

吉村健一さん(昭和22年生まれ、生野区在住)

昭和42(1967)年頃の電気館入口



電気館入口に絵看板が並ぶ。上映中の作品は、田宮二郎主演の「監獄への招待」とイタリア西部劇(ともに昭和42(1967)年公開)。入口上の次週予告は、名コンビ藤田まこと・白木みゆ子の「てなもんや幽霊道中」ほか。[この後、同館は昭和40年代末まで営業](井上平八郎氏提供)

玉造界隈

寺田町界隈

私たちの黄金時代が映った!

鶴橋界隈

私思い出

私思い出

私思い出

私思い出

映画館に通い詰めた青春もあった!